審査の結果の要旨

氏名　山本　一生

本研究は、東アジアの近代化の一側面としての「近代学校」形成の過程を、「連続／断絶」を軸とする具体的な様相に即して描き出すことをねらいとしている。通説によれば、東アジアの近代は外来の圧力の産物であって、社会の近代化は学校教育によって促進され、近代社会を建設するためにこそ、学校教育の普及が目指されるものとされてきた。従来はこの過程を、ナショナルヒストリー（一国史）として扱い、近代学校の普及は、政策的な視点から位置づけられるに過ぎなかった。そうした記述に欠落するのは、近代を受容しかつ教育を受ける当事者である「民衆」および学校教育をその現場で支えたアクター（とくに現地の有力者層と学校の教員）の動きである。本論文は、東アジアの近代教育史をもっぱら統治権力の変動の枠内で描いてきた先行研究の不備を衝き、「青島」という一都市を定点観測することでもって、東アジアの近代化とそれを担った主体の多面性を描き出し、ナショナルヒストリーに回収されない新たな歴史像を描こうとしている。

本論文は、序章および終章に挟まれた七つの章および参考文献一覧から構成されており、本論は「現地人教育を中心とする青島の近代学校」と題された第一部（第一章～第四章）と「「在外指定学校」としての日本人学校を中心に」と題された第二部（第五章～第七章）に分かれている。序章では、問題の所在を指摘し、先行研究のレヴューと史料についての予備的考察がなされる。第一章では、ドイツ統治下の膠州湾租借地における現地人学校（蒙養学堂およびミッションスクール）が、第二章では、日本統治時代の軍政期膠州湾租借地における現地人学校（公学堂）が、第三章では、日本統治時代の民政期における現地人学校（公学堂および青島商科大学構想）が、第四章では、北京政府期の膠澳商埠における現地人学校（膠澳商埠公立小学校および青島大学構想）が扱われ、「ドイツ→日本→北京政府」という統治権力の「連携プレー」が行われる中で、新興商人層は一貫して教育の近代化を希求し続けたことが確認される。

第五章では、日本統治下の膠州湾租借地における日本人学校の整備が、「在外指定学校」である青島日本人小学校の設立を起点として、初等・中等学校の日本人教員人事のネットワークに照準しつつ跡づけられる。第六章では、山東還附後の日本人学校の管轄の変化と初等・中等学校の再編過程が、第七章では、1930 年代の青島居留民団と教員人事との関係が解き明かされる。終章は、論点の総括と今後の課題と展望を述べて結ばれる。

以上のような論脈のもと、青島という都市に対して、膠州領総督府（ドイツ）→青島守備軍（日本）→膠澳商埠督辨公署（北京政府）と連なる複数の統治権力が持ち込んだ教育の近代化が折り重なり、重層化していく姿を「連続／断絶」を軸に据えて活写しようとしたのが本論文である。すなわち、近代国家の出先機関が移植した「近代」は、「連続／断絶」のどちらか一極に偏倚することなく、双方の極の間で摩擦を生じつつも受容されようとした。そうしたダイナミックな模索過程を、一都市に準拠しながら丹念に解明している。

現地調査を重ね、埋もれた資料を発掘・読解した努力は多とすべきであり、それを生かすためにも「近代学校」や「教育」などの基礎概念のさらなる彫琢が必要とされるであろうが、東アジア近代の教育史に《都市の定点観測》というアプローチを導入した点で、独創性と教育史研究への貢献とを二つながら実現しえている。よって、博士（教育学）の学位を授与するに十分な水準に達しているものと認定した次第である。